

地方だより

北大理学部地球物理学教室

北海道大学に気象学研究室が官制として発足したのは孫野長治教授が横浜国立大学から赴任された昭和30年3月である。しかし、雲物理学が気象学の一分野として登場して来た歴史的背景を考えると、北大の気象学的研究は、昭和7年、中谷宇吉郎教授が雪の結晶の観察を開始した時から、約25年間にわたって続けられて来たと言ってもよい。現在、地球物理学教室気象学研究室、物理学教室中谷研究室、低温科学研究所、札幌管区气象台、北海道学芸大学旭川分校と、広い範囲の研究者を横につなぐ雲物理研究グループが存在しているのも、この様な長い研究史の中から生れ出たものであり、又、その研究方法が物理学に基盤を置いていることも、受継いで来た伝統の一つと言えるであろう。

雲物理研究グループは、昭和30年10月、発足して以来、既に三回の講演会を開き、討論を重ねている。講演者と、その題目をあげると、

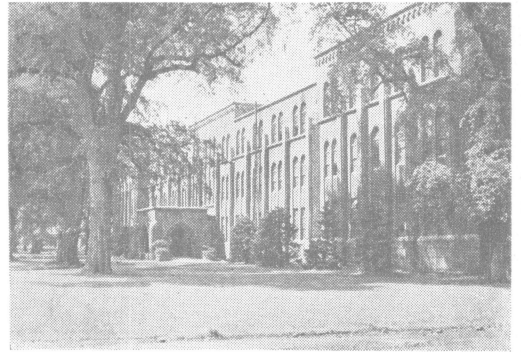
- ・第1回 (昭和30年10月) : 中谷宇吉郎 (北大理)
1955年度国際雲物理学会 (Woods Hop) 報告
 - ・第2回 (30年11月) : 堀健夫 (北大・低温)
水の過冷却について
 - ・第3回 (31年1月) C. E. Junge (Air Force Cambridge Research Center) On aerosol problem.
- である。

次に、このグループのメンバーの素描をしておく。グループの中心となっている孫野長治教授は、雨滴、雪片の観測によって、降雨降雪の機構を研究し、現在は、雪の結晶や雪片の荷電、空中電場の測定を主とした実験を



冬のフィールド。十勝岳 白銀荘 (1050m)

(撮影: 孫野長治)



理学部 (撮影: 孫野長治)

行っており、織笠桂太郎助手がこれを助けている。又、樋口敬二助手は、雪の結晶の形、大きさの頻度の観測を進めている。その他、数年来、中谷研究室で行ってきた山岳地帯の積雪・降水調査も、引継いで気象学研究室の手で行われており、中谷研究室板垣和彦助手によるラジオ・スノウゲージの実験と共に、水理気象学的成果をあげつつある。又、小元敬男助手によって、降雨の局地気象学的研究も、最近、始められた。以上、紹介した中で、気象学研究室に属するのは、孫野・樋口・織笠の三名であるが、新設の講座であるために、居室、実験室も不足勝ちで、中谷研究室の協力に負う所が大きい。

中谷研究室では、熊井基助教授が、電子顕微鏡によって天然雪の核の観察を続ける一方、最近、雪の結晶の成長の基礎をなす微水滴の研究にも当たっている。

理学部の外に、低温科学研究所にも、雪物理に関する観測や実験が行われている。黒岩大助助教授は、霧の凝結核の電子顕微鏡や化学的方法による探究を続けると共に、霜や雪の結晶の成長について、理論的解明を試みている。小林禎作助手は、氷晶について多くの観察や実験を行い、最近、拡散霧箱によって人工雪の成長過程を実験中である。その他、北海道大学ではないために紹介は省略するが、札幌管区气象台坂岸昇吉氏、北海道学芸大学 (旭川分校) 大喜多敏一氏が雲物理グループに属して、討論に加わっている。

農学部、農業物理学教室農業気象研究室では、八鍬利助教授が本年4月停年でお辞めになったが、現在、講座は権平昌司教授が兼務担当中であり、堂腰純助教授以下のスタッフによって研究が続行されている。

(昭和31年6月)

(樋口 敬二)

× × ×
× ×